

純水館茅ヶ崎製糸所と小山房全（3）

－書簡から読み解く純水館と小山家・工藤家－

名取龍彦¹

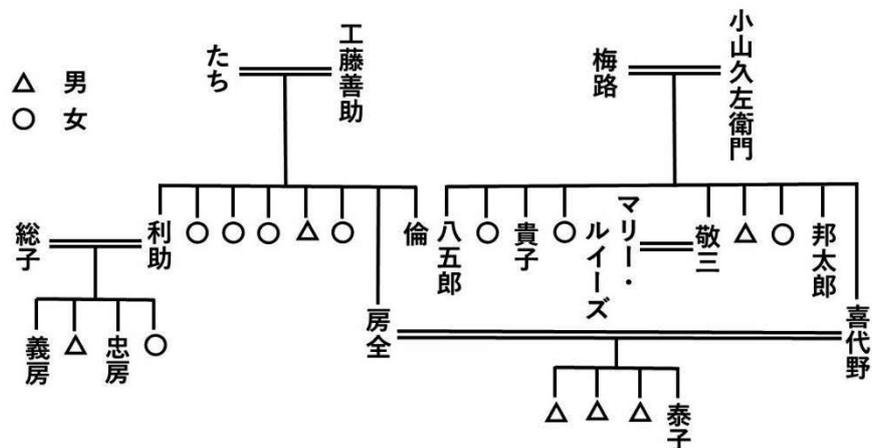
1 はじめに

筆者が所属する茅ヶ崎純水館研究会では、純水館茅ヶ崎製糸所（以降純水館）および館長の小山房全（明治15（1882）年生～昭和10（1935）年没 旧姓工藤）が関わった歴史的な事象を「純水館文化」と呼んでいる。純水館文化とは、今からおよそ100年前に「糸もつくるが人間もつくる」と評された房全が行っていた次のことがらをまとめたものである。

- ① 純水館は全国一とされる高品質生糸を生産し、御法川多糸繰糸機で作った生糸を他社に先駆けてアメリカへ輸出し高評価を得ていた。
- ② 純水館従業員への教育活動、福利厚生活動や茅ヶ崎町民への社会教育活動、社会貢献活動を積極的に行っていた。
- ③ 後藤新平、島崎藤村、伊藤長七や義弟で洋画家の小山敬三（文化勲章受章者、茅ヶ崎名誉市民）をはじめ政治、経済、芸術、教育、宗教など幅広い分野の人々と交流があった。

本稿では書簡を主な資料として純水館文化の一部を解説する。書簡は歴史的な事象を調査・研究するうえで重要な資料となる。昨年度の本研究紀要の拙稿では、上記③の房全を巡る人々に関して、既刊の島崎藤村の書簡が重要な資料となった（註1）。『藤村全集第十七巻』には、藤村から房全の妻喜代野への書簡1通（註2）、藤村から房全の義弟（喜代野の弟）小山敬三への書簡4通（註3）が収録されている。

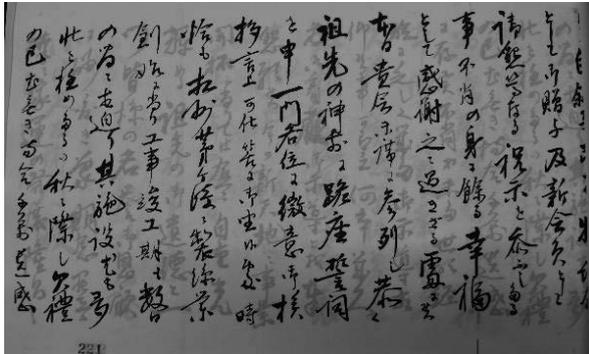
本稿では刊行されていない小山房全、小山喜代野、小山敬三の書簡を紹介し、それらを読み解くことで純水館および小山家・工藤家について解説することが目的である。第1図は、本稿で取り上げる人物の関係を示す小山家・工藤家の系図である。



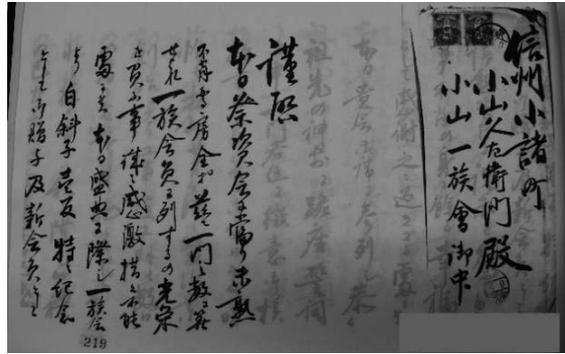
第1図 小山家・工藤家の系図

2 小山房全の書簡

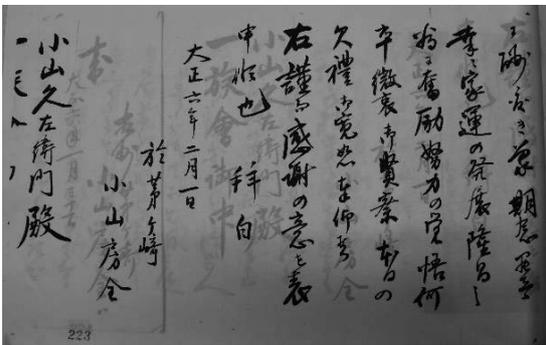
第2図は、房全から小山本家の小山久左衛門と小山一族会へ宛てた大正6（1917）年の書簡の写真資料である（註4）。房全が純水館の開業に関して書いている。



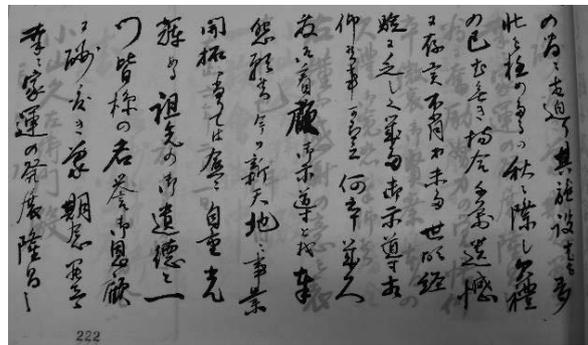
②



①

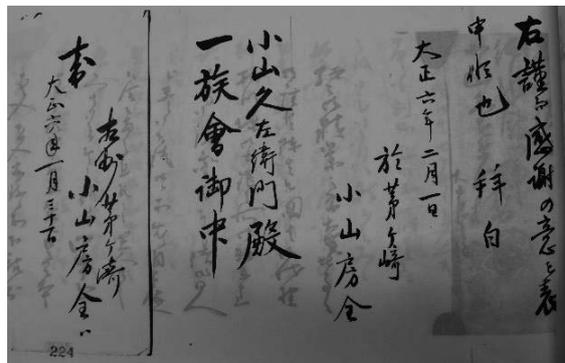


④



③

① ～ ⑤ が一枚ずつの写真資料のため重複する行がある。



⑤

第2図 小山房全の書簡 所蔵：荒町和合会古書蔵（小諸市）

〈第2 図の翻刻〉

信州小諸町
 小山久左衛門殿
 小山一族會 御中
 謹啓
 本日祭資會に當り未熟
 不肖處房全等茲ニ一門之數に算
 せられ一族會員に列するの光榮
 を負ふ事誠ニ感激措く不能
 處に候。本日盛典に際し一族會
 より白斜子壺反特ニ紀念
 として御贈与及新會員として
 御懇篤なる祝示を忝ふしたる
 事不肖の身に餘る幸福
 として感謝之ニ過ぎざる處に候
 本日貴會末席に參列し恭く
 祖先の神前に跪座誓詞

を申一門各位に微意御挨拶
 言上可仕筈に御座候處時
 恰も相州茅ヶ崎ニ製絲業
 創始に當り工事竣工期も数日
 の間ニ相迫り其施設尤も多
 忙を極めたるの秋ニ際し欠禮
 の已む無き場合千萬遺憾
 ニ存実不肖等未だ世故経
 験に乏しく幾た御示導相
 仰候事可有之何卒幾久
 敷御看顧御示導とを奉
 懇願候。今ハ新天地ニ事業
 開拓に當りては愈々自重光
 輝ある祖先の御遺徳と一
 門皆様の名譽御恩顧
 に酬度き象期念罷在候
 幸ニ家運の発展隆昌之

為に奮励努力の覚悟何
 卒微哀御賢察本日
 欠禮御寛恕奉仰候
 右謹而感謝の意を表
 申候也 拜白
 大正六年二月一日
 於茅ヶ崎
 小山房全
 一族會 御中
 相州茅ヶ崎
 小山房全
 封
 大正六年一月三十一日

純水館が開業したのは大正6（1917）年2月5日である。書簡の日付は大正6年2月1日で、封は1月31日となっている。書簡で房全は、小山一族会の祭資会の新会員になったことに感激し、一族会から記念品を贈与されたことへの感謝を述べている。さらに新たな会員として参列挨拶すべき祭資会に、純水館開業前の業務多忙のため欠席することを遺憾とし、新天地で事業に奮励努力することを表明している。

小山一族には同族結合・扶助のための組織である一族会（同姓会）があり、小山本家（宗家）を中心として、所属する一族十数軒がそれぞれ独立して商店などを経営していた。



第3図 小山一族会年賀状 所蔵：筆者

第3図は、昭和8（1933）年1月に一族会が出した年賀状である。純水館長として小山邦太郎の名が初めにある。明治23（1890）年に小諸で製糸工場の純水館を創業した小山久左衛門（文久2（1862）年生）は、大正7（1918）年に死去し、長男の邦太郎（明治22（1889）年生～昭和56（1981）年没）が家督を相続した。小山本家は延宝2（1674）年から続く小諸の豪商で、醸造業を本業とし、味噌・醤油・生酢を製造していた。代々小諸藩の御用達で、江戸時代の終わりには独礼席（藩主と対面できる特別席）を与えられた家格だった（註5）。久左衛門は、小山本家の婿養子となった房全（旧姓工藤）の義父である。後述する房全の妻喜代野は、久左衛門の長女である。小山本家は「ヤマク」の屋号を持ち、久左衛門の名を代々の当主が襲名した。本家は「酢屋久左衛門」を略して「酢久商店」と呼ばれ、房全の義父久左衛門正友が第23代当主だった。

年賀状によれば昭和8（1933）年当時、酢久商店は合資会社となっており、邦太郎は代表社員と記されている。酢久商店は醸造業の他、畳表・鯉節・麻布・花筵・莫塵等も扱っており、純水館事務所が酢久商店内にあった。また、一族会に所属する酢久商店以外の家が、家長、家業、屋号とともに12軒記載されている。一族の事業は、製糸・米穀・茶・菓子・日本酒・洋酒・石油・石炭・履物・金物・セメント・板硝子等多岐にわたっていた。10軒目に「製糸業 神奈川県茅ヶ崎町 全（屋号） 小山房全」との記載がある。

一族会は明治23（1890）年に小山一族会家憲を制定している。一部を抜粋する（註6）。

小山一族会家憲

第壹条 本会ハ小山一族会ト称ス

第六条 本会ハ一族永続及ヒ祖先頌徳之為祭資積立金ヲナスモノトス

第九条 本会ノ開期ハ左ノ三項ニ分チ之レヲ行フ

第一項 祭資会ト称シ毎年式月一日ト定メ宗家ニ於テ家憲朗読式ヲ行フ終テ祖先祭典ヲ挙グ

第拾条 一族祭資会ノ際各自前年損益決算帳ヲ発表シ純益金百分ノ三ヲ出金スルモノトス

第拾貳条 祭資積立金ハ各々祖先之功德ヲ収メ併セテ一族ノ隆盛ヲ期スルガ為ナリ故ニ一族中時ニ天災或ハ不可忍不幸ニ罹ル時ハ積立金十分ノ一以下ヲ以テ協議之上無利子有期貸與スルコトヲ得ル

『酢屋小山同姓系譜 百世不盡』(第2版)には祭資会について「祭資とはお祭りの費用のことです(大辞典)。一願発起した一族は、さらに先祖への感謝の気持ちを大切にす心の表現として、年に一度お祭りをして現在の生業の状態を祖先に報告し、その御加護を願ひ、その時それぞれの営業の過年度の利益の一部を先祖供養のため積み立てることにしました。前述のように新たな同姓会々員の入会式もそこで行なわれて来ましたが、共存共栄の永昌をはかる目的から、この積み金に余裕があり、また必要があった時はお互いの資金[たすけかね](但し貸金)として運用しようとする考えの下に小山同姓祭資会が始まりました。この会は発足以来昭和三年まで三十三年の間毎年二月ヤマクで執り行われ、この時は遠方のため月例の同姓会には出席できない一族の方々、御牧原(伴平)・満州(八五郎)・茅ヶ崎(房全)等も遠路馳せ付けて参加されて居ります」と記されている(註7)。引用文中のヤマクとは小山本家のことであり、祭資会の会合は1年に一度2月1日に小山本家へ一族が集まる大切な場であった。小山一族会家憲には、祭資会の会合で小山一族会家憲を朗読し祖先祭典を行なうことが定められている。また、祭資会は会員が純益金の3%を積み立て、先祖供養のお祭りや天災や不幸がおこった時に会員を援助することも定められていた。房全は大正12(1923)年の関東大震災の被災時に祭資会から支援を受けている(註8)。

房全は、小諸で純水館を創業した小山久左衛門の長女喜代野と明治40(1907)年4月12日に結婚し、小山本家の婿養子となった。本家から分家したのは大正5(1916)年9月24日である(註9)。房全の祭資会への入会は大正6(1917)年2月1日であり(註10)、書簡にある祭資会の会合が開催された日である。同年2月5日に純水館が開業する。『小山一族会日誌』には「大正六年二月壹日 於宗家祭資会 本日小山房全ハ茅ヶ崎製糸工場創業ニ際シ遺憾ナガラ欠席之旨ニテ小山八五郎答辞代読、同六時ヨリ宴会ニ移ル」(註11)とある。房全が欠席のため小山八五郎が答辞を代読したのである。第2図の書簡の日付が2月1日とあるので、八五郎が答辞として代読したのは、この書簡であったと推測する。八五郎は久左衛門の養子で、喜代野の弟である。

祭資会への入会式がある大切な2月1日に、房全が欠席せざるを得なかった多忙さがわかる『横浜貿易新報』(現『神奈川新聞』)の記事がある。見出しは「製糸場の開始 工女大に歓迎さる」で、本文には「信州の製糸家純水館小山房全氏の経営に係る三百人取の製糸工場は愈々竣成し二月五日より製糸事業に着手さるべし工女二百三十名は事務員四十余名附添の上一日午後六時到着したり同地有志者は煙火を打ち揚げ茶番興行などの大奮発にて歓迎したり」(註12)とあり、2月1日の純水館と茅ヶ崎町の状況を伝えている。町を挙げて純水館の開業を歓迎する中で、従業員が信州から茅ヶ崎に到着する当日に館長の房全が茅ヶ崎を留守にすることは無理だったと考える。

昨年度の本研究紀要の拙稿で房全のキリスト教信仰について述べたが(註13)、若干の考えを加える。房全はキリスト教を深く信仰していたが、信者にはならなかった。信者とはキリスト教の洗礼を受けた者を言う。房全が信者にならなかった理由は不明であるが、苦悩を抱えていたと推測した。本稿の執筆にあたり、房全が信者にならなかった理由を新たに考えた。

祭資会の会合は、会員の経営状況を確認・共有するだけでなく、同族意識を高め合う場であった。

小山一族会家憲第九条に謳われた「家憲朗読式ヲ行フ終テ祖先祭典ヲ挙」げる神聖な場が祭資会の会合だったのである。書簡中に「祖先の神前に跪座誓詞を申」とある。2月1日に小山本家で開催される祭資会の会合では、先祖の神前にひざまずいて誓いの詞を述べる場面があったことがわかる。「祖先祭典」は、小山一族会家憲を制定した当初には、小山家の菩提寺である海応院の僧侶により仏式で行われていたが、明治41(1908)年以降は神官による神式に移行している(註14)。

工藤家から小山本家の婿養子となり小山一族会に入会した房全にとって、祭資会の存在および毎年2月1日に行なわれる会合での祖先神前の祭典・儀式が受洗へのためらいとなったと推測する。

3 小山喜代野の書簡

喜代野(明治20(1887)年生)は房全の妻で、小山久左衛門の長女である。喜代野は大正12(1923)年の関東大震災の際、茅ヶ崎の自宅の倒壊で圧死した。喜代野の小諸義塾女子学習舎時代の恩師が島崎藤村で、藤村は小山家との関係が深かった。第4図、第5図は喜代野から義父の工藤善助(房全の実父)へ宛てた大正11(1922)年の封筒と書簡である(註15)。

善助は安政5(1858)年に長野県上丸子村(現上田市)で生まれた。房全が生まれたのも同所である。善助は「余慶堂」の名前で蚕種業を営み、「丸子の工藤」として工藤一族で工藤組を結成し蚕種業を盛んに行っていた。善助の次男房全は兄倫ひとしと家業の蚕種製造を手伝い、群馬、埼玉などを廻って蚕種を販売していた。善助は明治36(1903)年に長野県蚕種同業組合連合会会長に就任し蚕種業界の発展に尽力した。蚕種業で成功した善助は製糸業に転身し、大正2(1913)年に製糸結社依田社の第2代社長に就任する。また、長野県会議員として県会議長も歴任し、明治37(1904)年には衆議院議員となった。大正8(1919)年にはワシントンで開催された国際労働会議に資本家代表として出席し、大正11(1922)～12(1923)年には絹業視察団長として渡米するなど国際人としても活躍した。昭和13(1938)年に亡くなった。

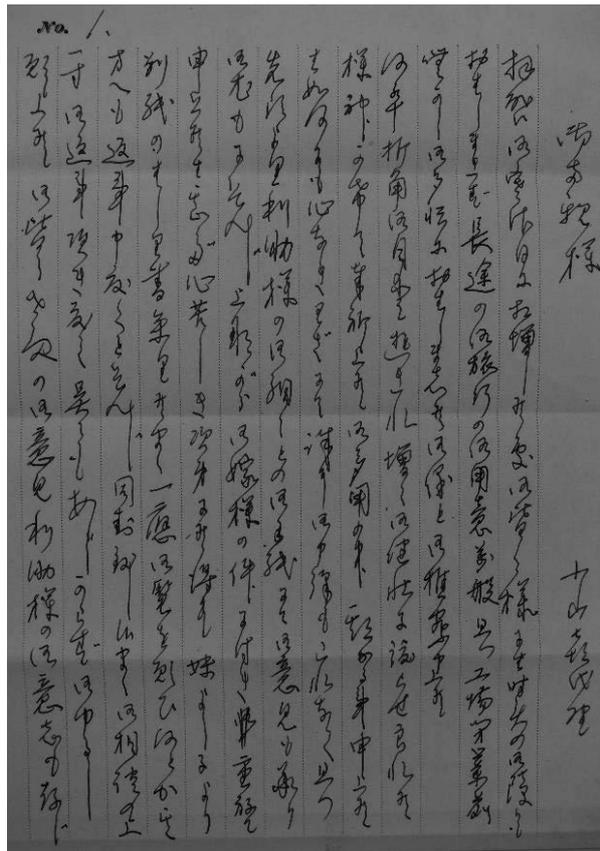
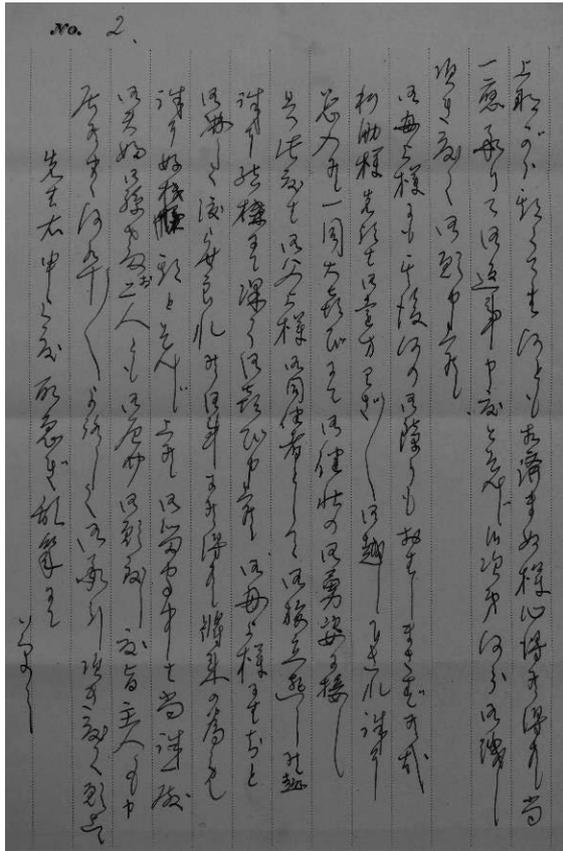
第4図は、絹業視察団が日本を出発する直前の大正11年12月14日の消印がついた喜代野から善助へ宛てた封筒の表裏である。善助の住所は信州小ちいさ県郡丸子町、喜代野の住所が相州茅ヶ崎町で12月12日付となっている。第5図は、第4図の封筒に入っていた書簡である。



第4図 小山喜代野書簡の封筒

所蔵：上田市立丸子図書館

寄贈：工藤義房氏



第5図 小山喜代野の書簡 所蔵：上田市立丸子図書館 寄贈：工藤義房氏

〈第5図の翻刻〉

NO.1

御両親様
小山喜代野

拜啓御寒さ日に相増し候処御皆々様には時失の御障りも
おはしませず長途の御旅行の御用意万般且つ工場閉業前
嘸かし御多忙におはしまし候御儀と御推察申上候
何卒折角御自愛遊され増々御健壯に渡らせられ候
様神かけて奉祈上候 御多用の中かかる事申上候
は如何にも心なきわざにて誠に御申訳もこれなく且つ
先頃より利助様の御細々との御手紙にて御意見も承り
御尤もにぞんじ上げながら御嫁様の件につき重ねて
申上候は甚だ心苦しき次第に候得共妹よし子より
別紙のはしり書参り候まゝ一応御覧を願ひ何とか其
方へも返事申度くとぞんじ同封致し候まゝ御相談の上
一寸御返事頂き度く呉々もあしからず御ゆるし
願上候御皆々さまの御意見利助様の御意思も存じ

NO. 2

上ながらかくては何とも相済まぬ様心得候得共尚
 一応承りて御返事申度とぞんじ候次第何分御識し
 頂き度く御願申上候
 御母上様にも其後何の御障りもおはしませず候哉
 利助様先頃は御遠方わざわざ御越し下され誠に
 恐入候一同大喜びにて御健壯の御勇姿に接し
 且つ此度は御父上様御同伴者として御旅立遊し候趣
 誠に結構にて深く御喜び申上候 御母上様にはちと
 御淋しく渡らせられ候御事に候得共将来の為め
 誠に好機かとぞんじ上候 御留守中は尚誠一殿
 御夫妻お孫さまお二人とも御厄介御願致し度旨主人も申
 居候まま何卒何卒よろしく御承引頂き度く願上候
 先は右申上度取急ぎ乱筆にて
 草々

書簡で喜代野は、善助の旅行前の準備、閉業前の忙しさ、健康を気遣っている。多用であることを申し訳ないと思いながらも善助の四男利助の結婚に関して、喜代野の妹よし子が仲介している件の返事を求めている。義母（たち）に対しては、利助が善助に同伴して渡米することを将来への好機であると喜びを伝えている。また、親族が工藤家にお世話になることをお願いしている。

書簡中の「閉業」は操業の休止を指している。製糸工場は、従業員の1年契約が一般的で、年末の12月20日頃に閉業式を行なって工場の操業を休止する。従業員は閉業式後に自宅へ帰り新年を迎え、春に契約更新して元の工場の開業式後に働くことが多い。

書簡中の「長途の御旅行」とは、ニューヨークへの絹業視察団を指している。書簡の内容を、小山家・工藤家、日本の蚕糸業史と関連させて述べる。大正12（1923）年2月5日～15日にアメリカのニューヨークで第2回国際絹物展覧会が開催された。アメリカ絹業協会からの要請で日本の視察団が渡米することになった。団長としてアメリカへ派遣されたのが善助である（註16）。『大日本蚕糸会報』には「米国絹業団の顔触」として22名の名前が紹介されている。そのなかに団長の工藤善助と工藤利助の名前があり、視察団の日程が「12月30日天洋丸にて横浜出発 2月3日絹業協会大会出席 5日より絹業展覧会視察 3月2日発帰朝の途に着く」とある（註17）。3月27日に横浜港へ帰着している（註18）。喜代野の書簡は12月12日付なので、視察団が横浜から出発する直前である。善助の同伴者として利助がアメリカへ随行することは、房全（利助の兄）の妻である喜代野にとっても大きな喜びであったと推測できる。第6図は「^{ニューヨーク}紐育に開催の国際絹物展覧会の招待会に臨める本邦渡米団の一行」の写真である（註19）。説明書きに「×は工藤団長 △は本会重富参事 ホテルコモドア

にて」とある。筆者がつけた矢印の人物に×が付いている。顔ははっきりしないが団長の工藤善助である。利助も同席していると思われるが判別できない。



第 6 図 紐育に開催の国際絹物展覧会の招待会に臨める本邦渡米団の一行
『大日本蚕糸会報』大正 12 年 4 月号 (375 号) 所蔵：シルク博物館

第 2 回国際絹物展覧会には純水館で繰糸した生糸が他の 25 の製糸工場の生糸とともに展示された。当時アメリカで注目されていたのは御法川多条繰糸機で生産された高品質の生糸である。房全は発明

後間もない御法川多条繰糸機を実用化し、他社に先駆けてアメリカへシルクストッキングの原料として生糸を輸出した。アメリカで最大手の靴下製造会社であるチニー織物製造会社が、展覧会場に出展された御法川多条機製の純水館生糸を購入して品質検査を行なった。高評価を得た純水館生糸の検査結果は日本の新聞でも公表された (註 20)。日本は、純水館以外の工場でも導入を進めていた御法川多条繰糸機を展覧会場へ持ち込み、繰糸の実演をしている。実演したのは、視察団 22 名中の佐藤いよ (中野蚕業試験場教婦) と岡崎エキ (東京高等蚕糸学校教婦) である (第 7 図 註 21)。佐藤はア



第 7 図 紐育絹物展覧會派遣技術員
『大日本蚕糸会報』大正 12 年 2 月号 (373 号)
所蔵：筆者

アメリカでの実演について帰国後に「参観の米国人から繭はどんな木になるものかとか、蛹は繭の中へ如何にして這入つたものかなどの奇問を発せられました」と『米国の絹展所感』に書いている(註 22)。

第 7 図には「図は蚕業試験場備附の御法川式器械の前にて実演の服装にて絹糸練習せる光景なり」との説明がある。御法川多条繰糸機がニューヨークの展覧会で重要な役割を果たすことを期待されていたことがわかる。喜代野の書簡は御法川多条繰糸機について触れていないが、房全は御法川多条繰糸機の実用化とアメリカへの生糸輸出に注力し、アメリカは日本製の高品質生糸に注目し、日本は繰糸技術の大きな転換期を迎えていた時期に書かれたものである。

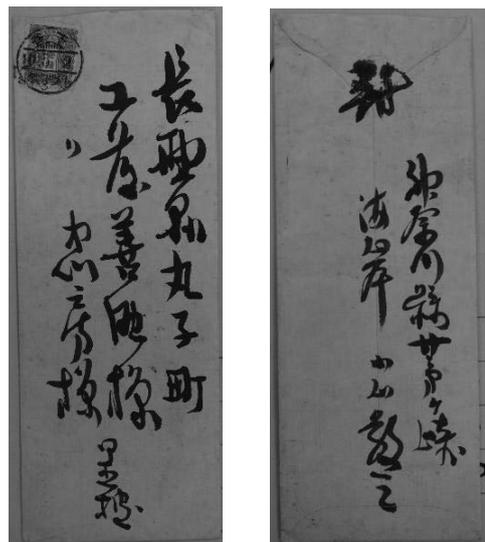
喜代野は善助と利助が渡米する直前に手紙を書いた。義父と義弟がニューヨークの展覧会場で、夫が作った御法川多条繰糸機製の高品質生糸に対面することを想像しながら書いたものとする。また、義父と義弟がアメリカ訪問後にフランスで弟の敬三と会うことも想像しながら書いたものとする。

視察団は大正 12 (1923) 年 3 月に帰国しているが、善助と利助は視察団から離れてフランス留学中の敬三と妻のマリー・ルイーズに会いに行っている(註 23)。房全・喜代野夫妻の長女泰子の回想には「私の父方の祖父工藤善助が叔父利助を伴ない米国に旅行しました。帰途ヨーロッパに廻りましたが、パリでは敬三叔父のアトリエのアパートに立寄り、つぶさに其の生活ぶりや画の制作に励む叔父の姿にふれることが出来ました。マリー叔母さんを紹介された事は最も意義深きことでした。帰国された利助叔父はマリールイズ夫人を非常に高く評価し、みめ麗しく優しさの内に確かなるものを秘められた毅然たる堂々とした女性で、良く敬三君の世話をしておられ、私の拝見した限りに於て誠に敬三君には最良の夫人と思うと意見を申し、私の両親は大変喜び安心したものの、当時日本では未だ外国人の夫人を迎えた方は少く日本へ連れ帰られても失敗に終る方の話のみ聞いてましたので、私の母(喜代野)は邦太郎叔父と計らって、責任をもって祖母や妹達又親類の方々に理解を求めべく決意していた」とある(註 24)。容易に外国へ行けなかった時代に、パリでの敬三の生活とマリー・ルイーズの人柄を善助と利助から聞いた喜び、外国人の妻を小山家に迎える不安と決意が伝わってくる。

書簡で喜代野は、義弟(房全の弟)利助の結婚に関して、妹よし子(貴子)と共に結婚相手の仲介をしている。利助(明治 33 (1900) 年生～昭和 10 (1935) 年没)は大正 15 (1926) 年 5 月 7 日に総子と結婚しているが、喜代野と貴子が仲介した縁組であったかは不明である。

4 小山敬三の書簡

敬三(明治 30 (1897) 年生)は茅ヶ崎名誉市民、文化勲章を受章した洋画家である。小山久左衛門の三男で、房全の妻喜代野の弟である。フランス留学中に結婚したマリー・ルイーズと共に昭和 3 (1928) 年に帰国した敬三は、翌年、房全の勧めで南湖に自宅兼アトリエを建て



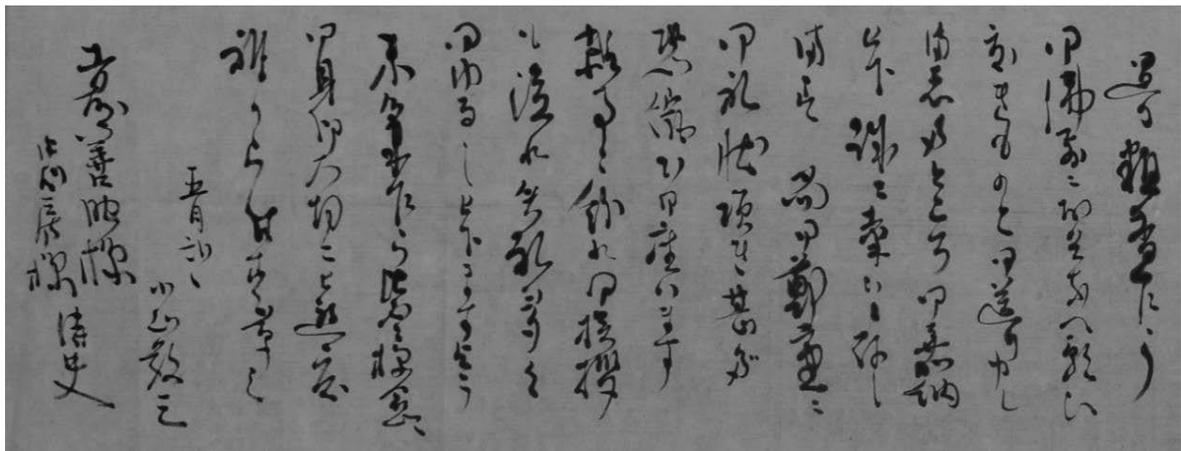
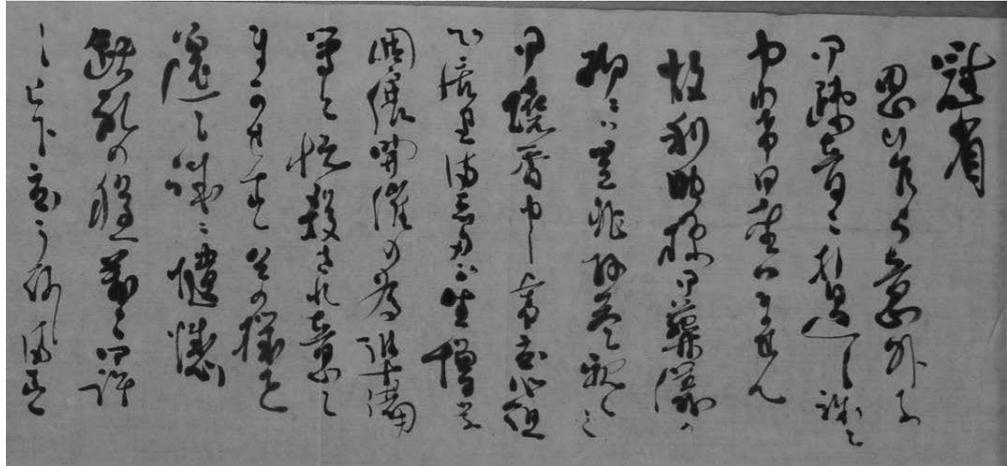
第 8 図 小山敬三書簡の封筒

所蔵：上田市立丸子図書館

寄贈：工藤義房氏

(註 25)、昭和 62 (1987) 年に亡くなるまで茅ヶ崎で制作を続けた。

第 8 図は、敬三が房全の父工藤善助と善助の孫忠房へ宛てた昭和 10 年 5 月 2 日の消印がついた封筒の表裏である。敬三の住所が神奈川県茅ヶ崎海岸と書かれている。第 9 図は、第 8 図の封筒に入っていた書簡である (註 26)。利助の葬儀に関する内容で、書簡中の利助は善助の四男で、忠房は利助の長男である。



第 9 図 小山敬三の書簡 (巻紙) 所蔵：上田市立丸子図書館 寄贈：工藤義房氏

〈第 9 図の翻刻〉

<p>冠省 思ひ乍ら意外に 御疎音ニ打過候誠ニ 申わけ御座いませぬ 故利助様御葬儀の 砌ニハ是非拝参親しく 御焼香申し上げ度心組 で居りましたが生憎處 個展開催の為準備 等ニ忙殺され意ニ まかせずその機を 逸し誠ニ遺憾 缺礼の程萬々御許 し被下度う存します</p>
--

過日粗香乍ら
御佛前におそなへ願ひ
度きものと御送り申し
ましたところ御嘉納
被下誠ニ幸いニ存じ
ます 尚御鄭重ニ
御礼状頂き甚だ
恐縮で御座います
雑事ニ紛れ御挨拶
も後れ失礼多々
御ゆるし被下ますよう
末筆乍ら皆々様愈々
御身御大切ニ被遊度
祈り上ます草々
五月式日
小山敬三
工藤善助様
忠房様 侍史

利助は昭和 10 (1935) 年 2 月 16 日に 34 歳で亡くなった。善助が団長を務めた絹業視察団に同行し、パリの敬三のアトリエを訪問した利助である。書簡で敬三は、個展準備に忙殺されて利助の葬儀に参列できなかったことを遺憾として許しを請うている。併せて葬儀後に送った供物の嘉納を幸いとし、その礼状に対して恐縮し、最後に工藤家の健康を祈っている。

書簡中に「個展開催の為準備等ニ忙殺され」とある。利助が亡くなった昭和 10 (1935) 年 2 月頃に準備を必要とする敬三の個展は、「小山敬三熱川及北品支那作品展」(昭和 10 (1935) 年 4 月 東京・銀座 資生堂ギャラリー)と「小山敬三滞欧滞支近作洋画個人展」(昭和 10 (1935) 年 6 月 大阪 有恒倶楽部)である(註 27)。当時について敬三は「(昭和 9 年の)春と秋に中国へ写生旅行に出かけた。まず天津で作画し、そのあと北京に行った。北京の大使館には柴山兼四郎中佐(後の中将)、川口清健陸軍中佐(後年のガダルカナル司令官)や外交官の木内良胤さんがおられ、大変好意を持って世話をしてくれた。北京から熱河へ行き、その制作作品を北京飯店での個展で披露した。その個展では、後の日独同盟に活躍したトロウトマンというドイツ大使が、作品を二点購入してくれた上、その夜晩餐にドイツ大使館に招待してくれたりした。また、天津の仏蘭西租界でも個展を開き、思いがけなく外人が作品を買ってくれたりし、成功であった。中国から帰国後、滞中の作品を中心に東京の資生堂と大阪の有恒クラブで個展を開き、これまた好評を得た。これは求龍堂の石原竜一君の主催であった」と回想している(註 28)。敬三が中国で精力的に絵を制作し、盛んに日本や中国で個展を開催し、好評を博している時期であったことがわかる。

引用文中の柴山は、兄の邦太郎とも関係がある。邦太郎は昭和 3 (1928) 年に衆議院議員となり国政に関わり始めた。昭和 12 (1937) 年から続く日中戦争さなかの昭和 15 (1940) 年に組閣した米内光政内閣で海軍参与官に就任した。邦太郎は同年 5 月に広東へ赴き、広東駐留軍司令官の柴山少将らと会っている。目的は、重慶にいた蒋介石を支援して和平工作を試みようとしたのである(註 29)。

柴山ら軍人、要人と邦太郎、敬三との繋がりがわかる。

敬三の書簡は、房全と喜代野の書簡に比べて変体仮名を多用している。敬三は絵画以外に多数の書を残している。小諸市立小山敬三美術館は 2022 年に令和 4 年度企画展「小山敬三の書展」を開催した。敬三は小山本家で富岡鉄斎の書画に囲まれて成長している。父の久左衛門は若い頃に 2 年程京都に滞在し学問を修めた。そこで、富岡鉄斎と出会ってから交流を続けた。敬三は久左衛門について「父の鉄斎に対する傾倒は大変なもので、人物も鉄斎、絵も鉄斎、書も鉄斎と、何でも鉄斎で、私は小学

校に行く前から、耳にタコができるほど鉄斎の名を聞かされた」(註 30) と回想している。現在も小山本家には鉄斎が書いた小山家の家訓があり、それを模写した敬三の書が小山敬三美術館に所蔵されている。

筆者は毛筆の敬三の書簡から「芸術家小山敬三」の筆遣いを感じた。

敬三は昭和 4 (1929) 年に小山本家から分家している (註 31)。同年は南湖に自宅兼アトリエを建て、茅ヶ崎での生活が始まった年である。

5 おわりに

純水館文化を研究するうえでの課題は、確認されている資料が少ないことであった。しかし、研究を進めるなかで現存資料の確認が徐々に進んだ。本稿では、未刊の小山房全、喜代野、小山敬三の書簡を通して、純水館および純水館を巡る人々を解説した。3 通の書簡からは房全の親族内のできごとだけでなく、日本の蚕業史との関連も確認できた。

本稿で取り上げた喜代野と敬三の書簡は、純水館文化に関する研究の広がりの中で関係者から紹介されたものである。所蔵場所は、房全の生まれ故郷であり、父善助、母たち、兄倫、弟利助らが暮らしていた長野県上田市にある上田市立丸子図書館である。上田市公文書館も含めて他にも多数の関係資料の存在が確認できているので、今後の研究に活かしたい。

純水館の時代からおよそ 1 世紀が過ぎ、失われる資料や記憶がある。出来るだけ早急に資料確認や聞き取り調査を行ない記録・保存活動を進めたい。

それらをもとに純水館文化の発信活動を続けることで、純水館文化の素晴らしさを知っていただき、多くの皆さんが地域の歴史に関する興味・関心、郷土に対する誇り、「郷土愛」を持っていただけるようになれば筆者として幸いである。

謝辞

本稿は書簡を主な資料とした。書簡は公開されることを想定していないので、書き手の思いがそのまま記されている貴重な資料である。しかし、翻刻が困難を伴うため歴史的な事実を知る手掛かりとして活用するのは大変難しい。今回、純水館文化の研究を進めることができたのは翻刻にご協力いただいた宮島かつ子氏 (上田市在住)、三宅淳一氏 (茅ヶ崎ゆかりの人物館 ゆかりラボ純水館研究室研究生)、加藤幹雄氏 (ちがさき丸ごとふるさと発見博物館の会会長) の力に負うところが大きい。上田市立丸子図書館、荒町和合会古書蔵、シルク博物館、茅ヶ崎市文化推進課には貴重な資料を提供していただいた。特に喜代野と敬三の書簡に関しては、上田市在住の工藤義房氏 (房全の甥) と安藤洋介氏 (上田市公文書館) に多大なご協力をいただいた。また、本稿をまとめるにあたり茅ヶ崎市博物館学芸員の渡部敦寛氏にご助言をいただいた。皆さまに感謝申し上げる。

最後になるが、本稿掲載の書簡 (私信) に関して、工藤善助、小山房全・喜代野、小山敬三のご子孫、ご関係の方々 (工藤義房氏、掛川國雄氏、中嶋慶八郎氏、森健氏) から内容公開のご了解をいただいた。また、荒町和合会古書蔵に関して土屋敏幸氏にお世話になった。深く感謝申し上げます。

1 茅ヶ崎純水館研究会

〈註〉

- 註1 名取龍彦 2024年 「純水館茅ヶ崎製糸所と小山房全(2)～房全のキリスト教信仰～」『茅ヶ崎市博物館研究紀要』1
茅ヶ崎市博物館 79頁
- 註2 島崎藤村 1968年 『藤村全集第十七巻』 筑摩書房 183～184頁：明治45(1912)年2月8日付
- 註3 註2同書 255頁：大正6(1917)年8月27日付 459頁：昭和3(1928)年7月23日付 478頁：昭和4(1929)
年6月23日付 543頁：昭和17(1942)年5月9日付
- 註4 『茅ヶ崎市史資料所在目録(3)』(茅ヶ崎市 1978年)269頁の資料番号41「書簡(一族会欠席二付)」。同目録には267
頁から270頁まで小山邦太郎氏所蔵資料として52点の資料が記載されている。その中に房全が小山本家に送った書簡が4
通あり、1通は久左衛門宛て、3通が邦太郎宛てである。小山邦太郎氏所蔵資料は、茅ヶ崎市が写真資料として保管している。
- 註5 齋藤幸男 2017年 『シルクの里小諸 純水館ものがたり』 樺 32頁
- 註6 村松敏 1992年 「商家同族団と祖先祭祀・事業経営－長野県小諸町の小山家の場合－」 『国立歴史民俗博物館研究
報告』第41集 201～203頁 同論文は小山一族会の家憲、先祖祭祀や事業経営の実態について考察している。尚、小山一
族会家憲は、前掲註4の『茅ヶ崎市史資料所在目録(3)』268頁の資料番号19「小山一族家憲」として茅ヶ崎市が写真資料
を保管している。
- 註7 小山登 他 2022年 『酢屋小山同姓系譜 百世不盡』(第2版) 30頁
- 註8 茅ヶ崎市 1978年 『茅ヶ崎市史2 資料編(下) 近現代』 313頁
- 註9 註8同書 312頁
- 註10 註7同書 33頁
- 註11 註8同書 312頁
- 註12 『横浜貿易新報』 大正6年2月2日付 『神奈川新聞』の前身が『横浜貿易新報』である。『横浜貿易新報』は「シ
ルクペーパー」とも呼ばれ蚕糸業に関する記事が多数掲載された。「純水館」「小山房全」の名が掲載された記事は、大正3
(1914)年～昭和10(1935)年に104本ある。
- 註13 註1前掲論文 69～83頁
- 註14 註6同書 183頁
- 註15 上田市立丸子図書館に所蔵資料目録『工藤善助調査資料』I～III(丸子図書館調査 1955年度 調査者：土屋寿子 調
査者指導顧問：阿部勇)がある。工藤善助調査資料の総数は3107点。その中に小山喜代野の書簡が1通(資料番号1328)
だけある。寄贈したのは善助の孫の工藤義房氏(長野県上田市在住 昭和10(1935)年生)で、書簡中の利助の三男である。
- 註16 名取龍彦 2021年 「純水館茅ヶ崎製糸所と小山房全(1)－アメリカへ進出した世界屈指の繰糸技術－」『文化資料
館調査研究報告』30 茅ヶ崎市文化資料館 56頁
- 註17 大日本蚕糸会 1923年 『大日本蚕糸会報』大正12年1月号 70頁
- 註18 大日本蚕糸会 1923年 『大日本蚕糸会報』大正12年6月号 32頁
- 註19 大日本蚕糸会 1923年 『大日本蚕糸会報』大正12年4月号 口絵
- 註20 註16前掲論文 54～55頁
- 註21 大日本蚕糸会 1923年 『大日本蚕糸会報』大正12年2月号 70頁
- 註22 註18同書 同頁
- 註23 小山正邦 1991年 『家郷への手紙 小山敬三 フランス留学の頃(1920～1927)』 102頁
- 註24 小山敬三画伯を偲ぶ会 中嶋蓉子 1988年 『小山敬三画伯記念集 思い出の記』 14頁
- 註25 見上義一 古谷平蔵 新居金三郎 1942年 『房全追憶録』 103頁
- 註26 註15の『工藤善助調査資料』の中に小山敬三の書簡が1通(資料番号3026)だけある。寄贈したのは第4図(小山喜
代野の書簡)と同じ善助の孫の工藤義房氏で、書簡中の忠房は義房氏の兄である。
- 註27 小諸市立小山敬三美術館 2015年 『小山敬三美術館収蔵作品集』 125頁
- 註28 小山敬三美術館友の会 2017年 『気韻生動の画家 小山敬三の世界』 小諸市立小山敬三美術館 50頁
- 註29 猪坂直一 1979年 『小山邦太郎の足跡』 小山邦太郎先生伝刊行会 181～183頁 小山本家には孫文、蒋介石の書
が扁額として保存されている。蒋介石の扁額には、邦太郎の長男正邦が記した孫文、蒋介石と邦太郎の交わりに関する解説
が添えられている。
- 註30 註28同書 4頁
- 註31 註7同書 33頁